

# 「魔法の種」プロジェクト 活動報告書

報告者氏名：木田啓二 所属：佐賀市立本庄小学校

記録日：2017年2月14日

キーワード：スケジュール活用、読み書き、表現活動

## 【対象児（A児）の情報】

○学年 小学校1年

○障害と困難の内容

□ 自閉スペクトラム症

- ・ 見通しが持ちにくい活動については、不安を感じることが多く、活動への取り組みに意欲を高められずにいることが多い。
- ・ 限られた人とのかかわりの中では、安心して過ごすことができる。
- ・ 多くの人の中で過ごすことに対して強い嫌悪感がある。

## 【活動進捗】

○当初のねらい

- ・ 自分の活動の見通しをもち、一つ一つの活動を終えたことの達成感を感じることができる。
- ・ 相手に伝えたいという意欲を高め、文字を用いた表現活動の楽しさを感じることができる。

○実施期間 平成28年4月～平成29年2月

○実施者 木田 啓二



○対象児との関係 特別支援学級担任

## 【活動内容と対象児の変化】

○対象児の事前の状況（5月半ば頃まで）

### ・ スケジュールの活用

入学前の療育機関では、登園後の1日のほとんどの活動を示したスケジュールを活用していた。活動の内容は、イラストや写真で示されたものを使っており、口頭で示されたものよりも具体物やイラストなど、視覚的にとらえられるもので理解できるように作られていた。そこで、入学時より右図のようなスケジュール表を用いて取り組んだ。スケジュール表の活用は、1つの活動が終わる毎に、イラストにペンで線を入れ、次の活動に移るように約束をしていた。5月末に行われた運動会までは、この形式のスケジュールで行っていたが、指導者の促しがないと終えた活動に自分から線を入れ確認をすることは少なかった。

5がつ16にち げつようび		1じかんめ		5がつ16にち げつようび		1じかんめ	
1	 ランドセル おつかい	 おうちのひと がっこうに いきます。	6	 ランドセル おつかい	 おつかい おつかい	 おつかい おつかい	 おつかい おつかい
2	 くつばこ	 おつかい おつかい	7	 おつかい おつかい	 おつかい おつかい	 おつかい おつかい	 おつかい おつかい
3	 あおぞら1	 おつかい おつかい	8	 おつかい おつかい	 おつかい おつかい	 おつかい おつかい	 おつかい おつかい
4	 かたづけ	 おつかい おつかい	9	 おつかい おつかい	 おつかい おつかい	 おつかい おつかい	 おつかい おつかい
5	 あそびかん	 おつかい おつかい	10	 おつかい おつかい	 おつかい おつかい	 おつかい おつかい	 おつかい おつかい

入学当初のスケジュール表

5月末に、スケジュール表の使い方についてA児に尋ねてみたところ、教室にある一人一人の時間割（校時別に教科名が書かれているもの）で十分だというA児の訴えがあった。ただ、保護者との話し合いで、時間割でも手元で確認ができるようなものがあり、自分で確認できるものがほしいという要望があり、これまで使っていたものから簡略化されたスケジュール表の活用が課題となった。

・ 読み書きの習得状況

入学前の療育機関では、活動内容を伝える際には、イラストや写真で示されたものを使っており、口頭で示されたものよりも具体物やイラストなどの視覚的にとらえられるものから理解することが得意であった。話を聞いて理解できなかったことや不安なことがあると気持ちを切り替えられず、数十分動かずイライラしたり、癇癢を起こしたりすることがあった。慣れた人には自分から話をすることはあるが、会話に転導性があり、話題がよく変わったり、一方的に話したりすることが多かった。一方で、自分の思いや考えを伝えるのに十分な語彙の蓄積があることが分かった。

文字の読み書きについては、入学後に、『小学生の読み書きスクリーニング検査』を実施した。実施結果は以下の通りである。

	ひらがな		カタカナ		単語	
	書取	音読	書取	音読	書取	音読
4月16日 実施	3/20	7/20	0/20	2/20	0/20	4/20
(遅延・修正)	(2・0)	(4・0)	(0・0)	(2・0)	(6・0)	(0・1)

入学直後に実施しており、文字の学習は、療育機関でもほとんど行っていなかった。自分の名前やテレビ、ゲームのキャラクター等で目にする文字について、いくつか書けたり読めたりしたものがあつた。ただ、全般的には、未学習であるため、低い数値となっていた。また、書いた文字を見てみると、形のいびつさや不正確さ、鏡文字が見られており、書くことの苦手さがうかがえた。まずは、書かれている文字から情報を取り入れることができるように、読むことを習得していくことが課題となった。

・ 特別支援学級や交流学級での活動

入学前は、自閉症療育機関で専門的な支援を受けていた。1対1もしくは少人数（5人以下）での活動が多く、大きな集団での生活経験がほとんどなかった。1対1のかかわりでは、一方的な話し掛けや思い込みで話すことが多く、相手に不快な思いをさせることがあつた。指導者を交えた小集団活動では、指導者と自分だけの関係の中で活動が進んでいた。小学校入学に向けて、小学校では友達をたくさん作り、休み時間や下校時には、一緒に遊びたいという思いを強く抱いていた。

入学後は、ほとんどを特別支援学級で過ごしている。特別支援学級には、5名（1年生A児、B児、C児、3年生D児、4年生E児）が在籍し、1年生は同じ交流学級に属している。そのうち1名（B児）も、1日のほとんどをA児と共に、特別支援学級で過ごしていた。常に一緒にいるB児を頼りに行動しており、授業中から休み時間、トイレまで共にしていた。また、3年生のD児にあこがれを抱き、その行動をまねて活動することが増えていた。C児やE児とのかかわりも多少はあるが、1日のほとんどは、B児とD児とのかかわりで占められていた。

交流学級には、A児の席が設けられていた。しかし、5月の半ばまでは、その席に座ることはなかった。唯一、交流学級に足を運ぶことがあつたのは、給食と毎日の宿題及び連絡プリントを取りに行く時であった。その際、隣席の子から声をかけられ、お世話をしてもらうことがあり、その子の名前だけは覚えていた。運動会の練習や本番では、交流学級の活動に参加することができた。しかし、交流学級の子とのかかわり合いながら活動を進めることはほとんどなかった。A児に今後の友達とのかかわりを尋ねたところ、今は、特別支援学級の友達とのかかわりで満足していると話していた。学校での生活は、特別支援学級での活動に限られているため、A児からの情報発信を通して、交流学級等の友達へのA児の活動についての理解を広げていく機会を設けていくことが課題となった。

○活動の具体的内容と対象児の変化

・ 活動に見通しを持ちながら安心して1日を過ごしやすいするための取組

5月末の運動会の終了後から、スケジュール機能のあるアプリ《DropTalk》を使い始めた。1日の時間割を作成しておき、朝の会の時に全体で確認を行った。また、各教科の学習の流れを固定化していたため、授業の始まりには、教科のスケジュール表を開いて流れを確認し、活動が終わる毎にチェックを入れ、活動の終わりを確かめていた。併せて、授業の流れを《DropTalk》と同様のものを電子黒板に提示し伝えていた。6月下旬になると、授業の始まり時に電子黒板に提示する本時の流れだけで十分分かるという発言がA児からあり、《DropTalk》による授業時間のスケジュールの必要性を感じなくなっていた。



時間割



終業式



《絵カードカウンター》



終業式での参加の様子

そこで、固定された教科の授業以外の場面での活用を行うようにした。行事や初めての活動では、内容ややり方を知るまでは、とても不安な表情を示すため、授業以上に丁寧な予告が必要であった。年度当初は、体育館など多くの人が集まる場へは、不安と緊張のため参加を拒んでいた。前日に《DropTalk》でスケジュールを確認したことで始業式等の行事に安心して参加をすることができるようになっていった。また、校長先生や生徒指導担当等の話がある際に、話がどのくらい続くのか分からないことへの不安もあったため、《絵カードカウンター》を使用した。自分でカウンターを減らすことができないが、指導者が話の流れからカウンターを減らして、話の残り時間を視覚的に示したことで、残りを確認しながら、話を聞くことができた。

特別支援学級のお楽しみ会では、カレー作りに取り組んだ。初めての活動であったが、事前にカレー作りの本を読み、その挿絵を使い、《ロイロノート》でカレーの作り方の流れを自分で作り、確認することができた。カレー作り当日は、《DropTalk》で手順を確認しながら、カレー作りを進めていた。1つの活動が終わる毎に、スケジュールにチェックを入れ、次の活動を自分から確認をしていた。一緒に活動していた友達にも、次の活動を伝え合うことができていた。初めての場での活動であったが、楽しみにしていたカレー作りに存分に参加ができ、満足してカレーを堪能していた。



カレー作りの流れ



手順を確認するA児



カレー作りの様子



校外学習においても、同様のやり方で参加をした。入学前には、保護者と一緒でなければ、大型バスに乗ったら、おでかけをしたりすることができず、行先にはどのようなものがあるか分からないととても不安を感じるがあった。そのため、行先のHPを《Safari》や《You Tube》を使って、どのような場所か、何があるのか、どんな催し物があるのかを写真や動画を見て確かめ、校外学習への期待を膨らませていた。



校外学習の一つ、「バルーンフェスタ」に行く際には、《かんたんスケジュール（無料版）》を使った。スケジュールが文字やイラスト、時間で表示をされ、残りのスケジュールが目盛りと数で表示されるので、A児には、分かりやすいものであった。前日には、A児と一緒に当日のスケジュールを確認し、不安に思っていることは、HPの写真や動画を見ながら再度確かめたことで、行きたいという気分が盛り上がっていった。



《かんたんスケジュール》で作成した「バルーンフェスタ」の予定



当日は、不安な表情を見せながらの登校であったが、指導者と再度スケジュールの確認をしたことで多少の安心感は抱いていた。その後は、友達と一緒にスケジュールを見て話すことで、少しずつリラックスすることができた。途中にも、友達とスケジュールを確認しながら予定をこなしていく姿が見られ、バルーンフェスタの会場では、友達と一緒に笑顔で過ごすことができた。



《かんたんスケジュール》の確認



電車内でスケジュールを確認するA児



バルーンフェスタを楽しむA児

A児にとっては、日々の習慣化した時間割や授業内容は、見通しが持ちやすく、落ち着いて参加できていた。行事等の非日常的な活動では、具体的な内容や状況を捉えることができず不安や緊張が高ぶってしまうことが多く、写真や動画で活動に見通しが持てる状況づくりを行ったことで、やるべきことを自分で理解し、その達成を自ら実感しながら次の活動に取り組めるようになっていた。学校生活での楽しさを感じながら、明日の活動を楽しみにするようになっていた。

#### ・ 自分の思いや考えを伝えるために必要な文字の読み書きを習得するための取組

入学当初より多弁で、気になることや自分が感じたことを指導者や相手に伝えることができていた。一方で、4月に実施した『小学生の読み書きスクリーニング検査』では、ひらがな、カタカナ、単語の全てにおいて、困難を示す評価であった。特に、文字を書くことについては、ほとんどできない状況であった。もちろん、ひらがな、カタカナの学習は入学後に始まるため、今後の習得過程の中で、学びやすい状況が必要であった。

4月中頃より、ひらがなの学習を始めていくと、ひらがなに興味を示し、読み書きの練習に取り組んでいた。ただ、習った直後は、プリントになぞり書きをしたり、空書きしたりして、その場では書いたり読んだりできるようになっていたが、日数が経つと正しく読み書きできなくなるものが多かった。そのため、1学期の目標を「ひらがなを正しく読めること」、「50音表からひらがなを選び出し文字として表していくこと」、2学期の目標を「カタカナを正しく読めること」とした。

「ひらがなを正しく読める」ために、1文字ずつ確認することができる《ひらがなどれかな》、イラストを

見ながらひらがなを並べ替える《もじすた》、複数のひらがなから表記された単語を構成するひらがなを選ぶ《ひらがな覚えよう！国語海賊》、複数表示されたひらがなの中から決められたテーマに関する単語を探し出す《もじさがし》等を活用した。《ひらがなどれかな》では、聞こえてくる音声と同じ発音をするものを探すことができ、自分で文字を読み上げながら確認をしていた。5月より毎日1分間ずつ取り組んだことで、2週間ほどで誤りなく選択することができていた。《もじすた》では、提示されたイラストを見たり、音声で読み上げられたりしたことを手掛かりに、濁点や半濁点、拗音、促音を含む単語を並べ替えることを行った。迷った時には、単語や短文が繰り返し読み上げられるため、発音を確認しながら並べ替えをしていた。テーマごとに合格をするとメダルが表示されるので、それを楽しみに取り組んでいた。拗音、促音等を学習した後、5月半ばから毎日2分間ずつ3週間行った。《ひらがな覚えよう！国語海賊》では、表示されたひらがなだけを頼り、それと同じものを選び、単語を作っていくもので、正解、不正解が集計され表示されるため、高い得点を目指して取り組んでいた。5月半ばより毎日1分間ずつ継続して行った。視覚的にひらがなをとらえ、文字の読みと字形の判別を高めるために取り入れたこれらの3つのアプリを活用して、6月半ば頃には、正しくひらがなを選んだり発音したりすることができるようになった。



2学期から学習が始まったカタカナについても、《カタカタどれかな》《モジスタ》を使い、カタカナの読みの習得を進めていった。カタカナの学習を進めていく中でカタカナの書き方を問うと、ひらがなと混同することが多くあったため、ひらがなとカタカナのアプリを混ぜながら、毎日5分程度の学習に取り組んだことで、2学期末には、ほとんどのひらがな、カタカナを正しく読むことができるようになっていた。



また、《もじさがし》では、テーマに関する言葉を多く知っておかないと問題をクリアすることができないため、指導者に積極的に尋ねたり、上級生の友達と一緒に取り組んだりする姿が多く見られた。教えてもらった単語の発音を手掛かりに、多くのひらがなから必要となる文字を探し出すことが容易にできるようになっていた。



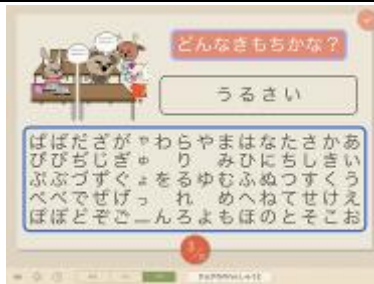
友達と教え合っている様子

「50音表からひらがなを選び出し文字として表していく」ために、ひらがなの50音表を理解することが必要であった。iPadの日本語入力をひらがなキーボードで行うため、《Finger Board Pro》を使ってひらがな入力の練習を行った。表示されたイラストを表す文字を50音表から選び、正誤の判定を受けることができ、たくさんの正答を得ようと取り組んでいた。拗音や促音の表現が難しいものについては、指導者が口頭で「しゃ」と「しや」のどちらの発音をしているかなどと問うと、正しい表記を選ぶことができた。また、「動物」「食べ物」「道具」「場所」「動き」「気持ち」など様々なテーマの問題に取り組むことで、よりよく相手に伝えるための語彙に少しずつ触れることができていた。





テーマ選択画面



50音表を使った選択画面



操作する様子

50音表より必要な文字が選択できるようになったところで、50音キーボードを使っての文字の入力を始めた。《SimpleMind+》を使ったスリーヒントクイズ作りから取り掛かり、自分が考える内容を思い起こし、キーボードを使って入力ができるようになっていった。また、2学期の初めには、《SimpleMind+》を使い、作文の構成作りに取り組んだ。夏休みの出来事の写真を見ながら、指導者と写真にかかわる内容を振り返りながら、その時のことを思いつくままに書き出した。その後、《SimpleMind+》のメモのキーワードを手掛かりに特別支援学級の友達の前で夏休みの思い出を話すことができた。



夏休みの写真



《SimpleMind+》で作成したキーワード



発表するA児

交流学級の1年生では、ひらがなやカタカナなどの文字を書くことを通して文字を習得する学習が多く行われているが、A児にとっては、その学び方では、自分が思ったように身に付けることができずにいた。A児の実態に合っためあてを設け、A児が得意な見ることや聞くことを使いながらできる状況で学ぶことができたことで、A児は、楽しみながらひらがなやカタカナの読みや形の選択を習得することができた。また、文字の弁別ができるようになったことで、50音キーボードを使うことができるようになり、文字として伝える際には、50音キーボードを使いながら表現ができるようになっていった。

・ **人とのかかわりを広げるための情報発信の取組**

1学期は、1日のほとんどを特別支援学級で過ごしていた。入学前は、たくさんの友達と一緒に遊ぶことを心待ちにしていたが、実際に交流学級の教室にいる友達の数を見ると圧倒されていた。そのため、交流学級に出向くことが、給食や連絡プリントを取りに行くことに限られていた。A児に尋ねてみると、「今は、あおぞら（特別支援学級）の友達でいい。」と話し、交流学級での活動やかかわりに魅力を感じることはできずにいた。そこで、今年度は、特別支援学級でのかかわりを増やすことにした。

朝の会や国語の時間に、スリーヒントクイズに取り組んだ。身近な道具や食べ物などを題材に、その特徴等を書き出すために、《SimpleMind+》を活用した。《SimpleMind+》では、「色」「味」「形」の3つで果物の特徴を書き出した。カードの色分けをすることで特徴の区別ができるため、他の特徴を見ながら考える際の手掛かりにもなった。はじめは、テーマが果物から始まり、おかず、文房具、教室の道具などをテーマとして取り上げることもあった。学級内で、自分で作ったスリーヒントクイズを朝の会の当番になった際に、みんなに出し合うことで、自分のクイズで友達が喜んでくれていると感じることができていた。



《SimpleMind+》で作成したクイズ



《SimpleMind+》で作成したクイズ



クイズの内容を本で調べるA児

A児は、入学前に「友達をたくさん作り、一緒に遊びたい」という思いを抱いていたが、大きな集団との出会いに戸惑った入学当初であった。特別支援学級の中での遊びを通した1対1のかかわり合いを深めたことで、そこに居心地のよさを感じていた。この集団に対して、自分がクイズの出題者となり周りの友達にかかわることを経験したことで、集団の中にいる自分を少しずつ感じるようになっていた。このような出番のある活動を広げていくことで、A児が在籍する特別支援学級以外の人とかかわる機会を設けることにした。

2学期は、A児にとって初めての活動となる校外学習や野菜の栽培活動があった。この2つの活動を通して、A児が周りの人に自分から情報発信する機会を設けることにした。校外学習では、1年生と一緒に「秋の遠足」、特別支援学級の仲間と出かける「バルーンフェスタ」に参加をした。どちらの活動においても、前述した《DropTalk》や《かんたんスケジュール》を使い、安心して活動を楽しむことができた。そして、活動後に、《ロイロノート》を使って、その様子をまとめる活動を行った。《ロイロノート》は、写真や文字、音声での表現ができ、A児もすぐに使いこなすようになった。「秋の遠足」では、はじめに、iPadに保存された写真から自分が必要とするものを選び、それを時系列に並べることができた。他の児童も同様の活動を行っていたので、時折、尋ね合いながら活動を進めていた。その後、選んだ写真を見ながら、「どんな写真か」「何をしているとことか」「どんな気持ちだったか」などの指導者の問いに答えながら、それを、文字として入力していた。最後に、入力した文章の音声を録音し、「秋の遠足思い出スライド」を作成することができた。出来上がったスライドは、電子黒板に投影し、特別支援学級に在籍する他学年の友達に紹介することができた。スライドについての質問にも笑顔で答えることができていた。



はじめてだった さんちようした



どんぐりむらにいて ぞきぞきした



やぎにエリをやるのが はじめてだった



発表するA児

《ロイロノート》で作成した「秋の遠足思い出スライド（一部）」

「バルーンフェスタ」でも、同様の写真、文字、音声を使い「バルーンフェスタ思い出スライド」を作成した。秋の遠足の翌週に出かけていたので、まとめ方も分かり、自分でスライドの作成に取り掛かり、仕上げることができた。できあがったスライドをビデオにして、おうちの人に紹介することを伝えると恥ずかしがりながらも、張り切ってスライド作成に取り組んでいた。また、特別支援学級の中で、お互いの作品を見合ったことで、文字の表記や読み間違いに気付き、文字の表記や録音した音声を自分から確かめていた。



ざっぶるがいました



でんしゃがくるまで ぞきぞきした



いろんなバルーンが いっぱいあった



バルーンをふんだ

《ロイロノート》で作成した「バルーンフェスタ思い出スライド」(一部)



本校では、特別支援学級の取組として、野菜の栽培活動を行っている。9月当初よりだいこんや白菜の種まきや間引き、除草、収穫、販売の一連の活動に取り組んでいる。知的障害特別支援学級では、生活単元学習のとして「あおぞらショップを開こう ～あおぞらのやおや～」を行っており、A児が在籍する特別支援学級では、生活科「野菜を育てよう」として、この活動に取り組んだ。昨年度経験をしている他学年の友達と一緒に栽培活動を行い、その様子を見ながら、種まき、間引き、除草などを経験した。その際、《カメラ》を使って、だいこんや白菜の成長の様子を写真に撮り、保存をしていた。本校では、11月末に「本庄フェスティバル」を開催し、各学年の学習の成果等を体育館や教室で発表をしている。特別支援学級では、毎年、この日に「あおぞらショップ」を開店し、体育館のステージでは「あおぞらショップ」の紹介を行っている。今年度は、だいこんの成長の様子をA児が在籍する特別支援学級が担い、発表することになった。そこで、これまで取り組んできた《ロイロノート》を使って、だいこんの成長をまとめた。大根が大きくなっている様子やお世話をする友達の様子が伝わるような写真を選んだり、選んだ写真にコメントを付けたりして、作品を完成させることができた。そして、当日の発表に向けて、スライドに音声を録音して臨んだ。何度も録音した声を聞きながら、分かりやすい発音になっているか、声の大きさは聞きやすい大きさか、早口になっていかなどを確認し、自分なりに納得のいくまで修正を行っていた。



《ロイロノート》で作成した「だいこんショップのしょうかい」のスライド（一部）

「本庄フェスティバル」の当日には、体育館で全校児童や保護者の前で発表をした。プロジェクターを使い、iPadの画面をスクリーンに投影し、《ロイロノート》で事前に作成したスライドを指1本の操作で発表することができた。多くの人の前に立って発表する経験がなかったA児であるが、録音した音声を正確に聞き、再生し終えてから次のスライドに移動をしていた。当日は、6枚のスライドの操作であったが、やり終えた後は、ほっとした表情の中にも、笑顔があふれていた。発表後には、多くの友達や先生から声を掛けられ、恥ずかしそうにしていたが、「あおぞらショップ」の開店の際には、開店を待つたくさんの人たちの姿を見て、とても喜んでいて、販売会では、売り子として「いらっしゃいませ」「だいこんおいしいですよ」「たくさん買ってください」と言った声を発し、たくさんのお客さんをもてなしていた。準備した150本のだいこんがあつという間に売り切れ、A児をはじめ、特別支援学級のみんなはとても満足した表情であった。



体育館で発表するA児



開店を待ちわびるA児



接客をするA児



書くことの苦手さや多くの人とかかわることへの関心があまり高くないA児であるが、自分ができる表現方法が使えたことで、自分から何かを伝えたいという思いが少しずつ育まれている。自分が表現したことで、周りの人が喜んでくれたことや、表現したことが伝わったことが実感を伴って理解できたことで、少しずつ周りとのかかわりを広げていくことにつながればと考える。

【報告者の気づきとエビデンス】

・ **活動に見通しを持ちながら安心して1日を過ごしやすくするための取組**

入学当初は、細やかなスケジュールを提示し、活動を促していた。毎朝の日課的な活動が多く、学校生活に慣れてくると、A児自信がスケジュールの必要性を感じなくなっていた。また、学習においては、個別の時間割で一日を大まかな流れを理解し、授業の始めに《DropTalk》で提示された授業の流れを知ることで、45分間の授業に最後まで参加をすることができるようになった。2 学期後半からは、授業の始めに指導者が話す授業の流れを聞くことで大丈夫と話すようになっていた。

一方、学習や行事等については、入学当初の行事等では、普段の生活と違ったことをするため、終わった後には「とても疲れた」「もういいや」「長かった」などの言葉を漏らしていた。しかし、《DropTalk》や《かんたんスケジュール》、《絵カードカウンター》を使って、活動の流れを確認することができ、見通しを持ちながら参加する機会が増えことで、活動中や終わった後の表情が、穏やかになり、終わった後も笑顔が見られることが多くあった。家に帰ってからは、母親に「1年生の集会に参加したよ」「全校の集いで命の話があったよ。車、人、雷、火に気を付けるんだよって言われたよ」と話していた。見通しが持てるスケジュールの活用で、安心して活動に参加し過ごせるようになってきていることが感じられた。

・ **自分の思いや考えを伝えるために必要な文字の読み書きを習得するための取組**

入学前のA児にとっては、身の周りの情報は、目で見て理解し、話を聞いて分かることでなんとか生活が成り立っていた。また、自分の思いや考えは話し言葉として伝えることができおり、日常生活の中で、文字の読み書きができないことがそう不便ではなかった。小学校の入学とともに始まった文字学習で、読んだり書いたりすることの苦手さが表れてきた。ただ、A児にとっては、文字から情報を得たり、文字を介して情報を発信したりする必要を感じておらず、文字学習への取組も意欲的とは言い難かった。

そこで、A児が好きなゲーム的要素を含む学習アプリを使い、かつ、視覚や聴覚を使ったA児の持てる力を活用して取り組める状況を整えたことで、文字を使いたいという思いを上回る「点数を多くとりたい」「次のステージへ進みたい」「レアカードをゲットした」という思いで文字学習アプリに取り組んでいった。毎日、短い時間での活用であったが、文字学習アプリを使うことを心待ちにし、集中して取り組む姿が見られた。2 学期までのA児のめあては、「ひらがなやカタカナを正しく読めるようになる」「50音表からひらがなを選び出し文字として表していくこと」であり、下の『小学生の読み書きスクリーニング検査』の結果が表すように、ほぼ読みについては、めあてを達成できていた。

実施月	ひらがな		カタカナ		単語	
	書取	音読	書取	音読	書取	音読
4 月	3/20	7/20	0/20	2/20	2/20	4/20
9 月	12/20	20/20	0/20	3/20	8/20	20/20
1 2 月	18/20	20/20	8/20	17/20	17/20	20/20
2 月	18/20	20/20	14/20	19/20	18/20	20/20

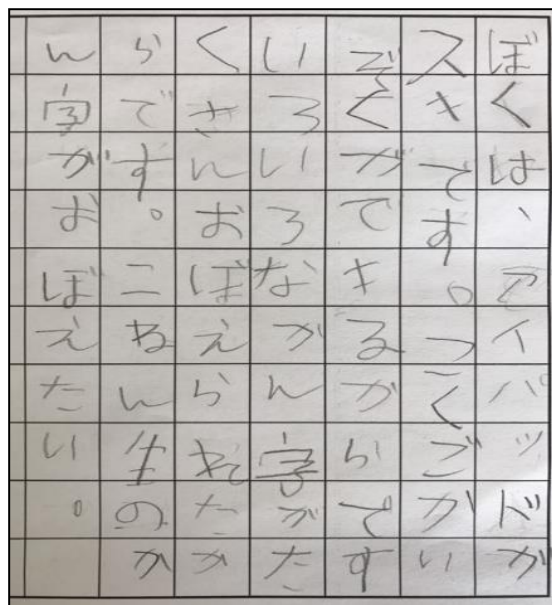
今回の報告書では、漢字習得については取り上げていないが、着実に1年生で習得する漢字を覚えている。読みについては、8割程度正しく読めている。また、書くことについては、形のいびつさは見られるが、半分程度の漢字を正しく書くことができるようになっている。漢字についても、ゲーム的要素を含むアプリを用いたことで、A児の意欲が高まり、習得へとつながっていったと考える。

• 人とのかわりを広げるための情報発信の取組

入学以前は、小学校ではたくさんの友達を作って、一緒に遊びたいという思いを抱いていた。しかし、実際に入学し、交流学級や全校とのかわりの中で、多人数に圧倒されてしまい、多くの人の中で居心地のよさを感じることができずにいた。A児からも、「特別支援学級でB児と一緒に過ごしたい」という訴えがあった。これは、現在でも変わっておらず、次年度も本人と相談をしながら交流学級とのかわりを考えていく必要がある。その一方で、自分たちが発信した「あおぞらショップの紹介」を思い出し、たまねぎの苗植えの際には、「また、みんなに知らせて買いに来てもらおうね」と友達と相談をしていた。校庭で見つけてきた虫や花などを手にし、「このめずらしいものをみんなに教えたいな」というつぶやきも増えてきている。直接的にかかわり合いたいという思いには届かないが、自分から目的をもって誰かに伝えたいという思いが芽生えてきていることが感じられた。

• その他の気付き

入学当初のA児は、本を読んだり、鉛筆を持ったりすることに抵抗があった。今回の取組の中で、ゲーム的な要素を含むアプリに夢中になり、読み書きができる文字が増えてきたことを実感できるようになった。国語の音読では、多少のたどたどしさはあるが、自分から進んで読もうとする意欲が見られはじめた。右の写真は、1年間使ったiPadについて、A児が書いた作文である。指導者と会話しながらiPadについて考えたことを文章として表現することができた。いくつかの文字は、「どう書くの?」と尋ねることがあったが、鉛筆が止まることなく、書き上げることができていた。



【今後への見通し】

- 小学校生活が始まり、まだ1年も満たないA児である。また、これまでは、特別支援学級での学校生活がほとんどであり、その毎日が習慣化されている。今後、学年が上がり、交流学級での授業に加わったり、様々な行事等に参加したりすることも増えてくる。その際にも、A児が安心して過ごすことができるように交流学級担任や他の職員と共に、A児に合ったスケジュールの伝え方を深めていく必要がある。
- 今回の取組では、主にひらがなやカタカナの読みの習得を中心に行った。1文字ずつや単語では正しく読めるようになっているが、多くの言葉で構成される文章を読みながら、内容を十分に理解するまでには至っていない。読書への興味関心を喚起しながら、読上げアプリやデジジー教科書等の活用をすることで、読むことへの配慮を行っていく必要がある。
- 日々の生活の中でも様々な気付きや発見をしているA児である。それらを周りの人に伝えたいという思いも育ってきている。ただ、A児からの一方的な発信に留まっていることは否めない。今後は、これらの発信したい内容や思いを共有しながら、それらを話題としてかわり合えるような機会を設けていく必要がある。